

# 高等学校における授業を通じた 心理教育的援助サービスについて

— 生徒同士で支え合う関係づくりを目指して —

鈴木章昭<sup>1</sup>

人とのコミュニケーションが上手くとれない生徒が多くなり、互いに支え合う関係をつくるのが難しくなってきた。そこで、エンゲストロームの「活動理論」を援用し、「ピア・サポート」のエクササイズと技法を取り入れて、「教科指導」と「教育相談」にかかわる二つの活動システムの相互作用としての授業モデルをデザインした。その授業モデルの具体的な実践を通じて、有効性と課題を検証・考察した。

## はじめに

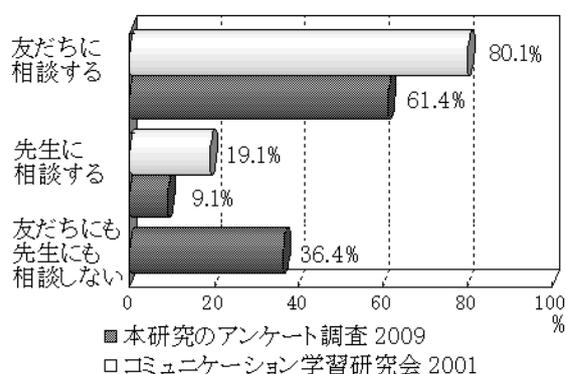
「かながわ教育ビジョン」(平成19年8月)では、青年期の状況として、「人とのコミュニケーションが上手くとれない、好ましい人間関係が築けない人が以前より多く見受けられる」(p. 33)と指摘し、学校では「学校教育全体で、友人を思いやる心や様々な人々と共生できる豊かな心」(p. 34)の育成に努めるよう述べられている。また、「高等学校学習指導要領」(平成21年3月)の総則では、新たに「生徒の発達段階を考慮して、生徒の言語活動を充実する」必要性が示された。このことから、高等学校の様々な教育活動において、コミュニケーション能力の伸長をより積極的に図ることが求められていると言えよう。

「心理教育的援助サービス」とは「心理学を基盤とするサービス」であり、「学校教育を通して子どものニーズに応じていく」(石隈 1999)システム的な活動という。本研究では、心理教育的援助サービスの一環として、コミュニケーション能力を高める新しい授業モデルのデザインを行う。

## 研究の内容

### 1 研究の目的

第1図のアンケート調査を見ると、高校生は悩みの相談相手に友だちを選ぶことが多く、教員への相談は非常に少ないことが分かる。本研究でも、コミュニケーション学習研究会(2001)と同様のアンケート調査を公民科「倫理」選択者44名(2年生33名、3年生11名)を対象に実施した。四つの選択肢のうち、「よく相談する」「まあまあ相談する」と答えた人は、コミュニケーション学習研究会のアンケート結果よりも低い割



第1図 高校生の相談相手

合になった。また、友だちにも教員にも相談しない人は、教員に相談する人の4倍に達している。アンケート実施中に、そもそも友だちがいない人はどう回答したらよいかと尋ねる生徒もいた。

こうした状況では、教員が生徒本人のニーズに寄り添うことは難しく、生徒の教育的ニーズ(生徒自らの力では解決できない困難な課題)にもなかなか気付けない。一方、相談相手に選ばれることが多い友だちは、身近な人的資源として、その重要性はますます高まるであろう。そこで、高等学校における支援の在り方として、コミュニケーション能力を高めるための心理教育的援助サービスを行う意義は大きい。

本研究では、集団の中にいれば、自然に人とのコミュニケーションが上手くとれるようになるという前提には立たず、生徒同士で支え合う関係づくりを目指す授業が、有効なサービスであることを示す。

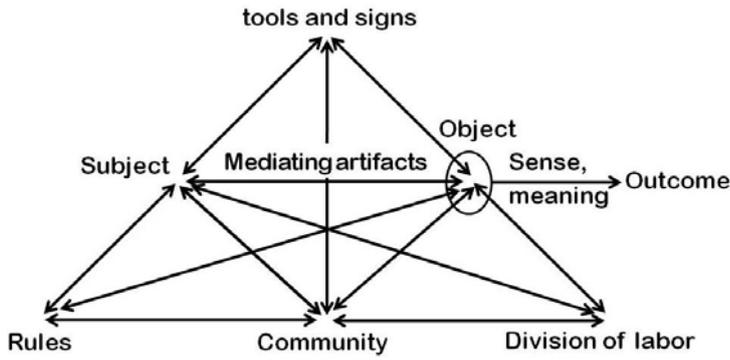
### 2 エンゲストロームの「活動理論」を援用する

#### (1)なぜ「活動理論」なのか

新しい授業モデルをデザインするという試みは、授業のシステム構造を分析して、その変革を企図するものである。

「活動理論(activity theory)あるいは文化歴史的

1 神奈川県立座間総合高等学校  
研究分野(学校コンサルテーション臨床研究)



第2図 The structure of a human activity system (Engeström 2001 p. 135)

活動理論(cultural-historical activity theory)は、人びとの協働によって創造される多様な社会的実践活動を対象に、その分析とデザイン、そして変革を統合した研究を展開する領域横断的なパラダイムである(山住 2004)と言われている。また、エンゲストローム(Yrjö Engeström)の活動理論には、注目すべきキーワードがある。それは、既存の境界を横切る水平的な運動を意味する「越境(boundary crossing)」という概念(山住 2008)である。このキーワードが作り出す文脈は、活動理論で展開される分析、デザイン、変革の統合と深く関係している。よって、授業モデルを新しくデザインする上で、活動理論が本研究の理論的な枠組みになり得ると考え着目した。

(2)「活動システム」のモデル

エンゲストロームは「活動システムの構造」について、第2図のようにモデル化している。図中、上部にある三角形の頂点 Subject (主体)、tools and signs (道具・記号)、Object (対象)は、Subject が tools and signs を媒介して、Object に向かうことを示している。この関係は、人の行為や実践が集合的であることを踏まえ、大きな三角形の底部にある Rules (規則)、Community (共同体)、Division of labor (分業) の各

成分によっても関係付けられる。

Subject の活動は、Mediating artifacts (媒介する人工物)を通じて、Sense、meaning (意味、意義)をもった Object によって方向付けられ、Outcome (成果)を目指す(エンゲストローム 1999)とされる。

エンゲストロームは、第3図のような相互作用する二つの活動システムについてのモデル化も行っている。本研究における新しい授業モデルは、この活動システムのモデルを使ってデザインしていく。

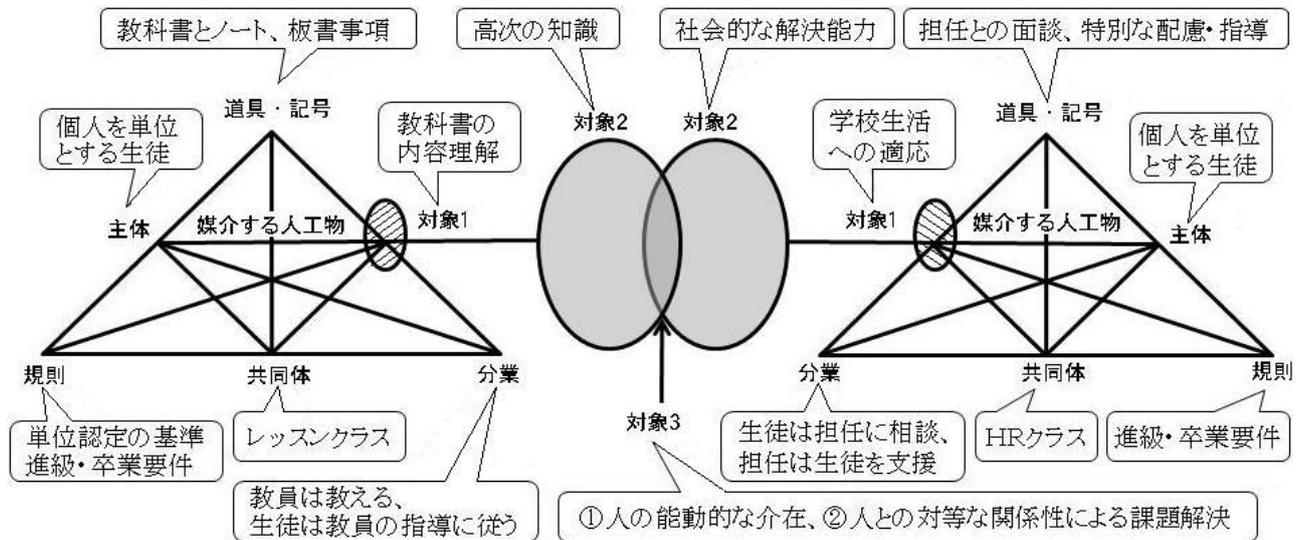
3 授業モデルの新しいデザインに向けて

(1)相互作用する二つの活動システム

本研究では、従来の学校教育における二つの活動システムの相互作用から、授業を通じた心理教育的援助サービスをデザインする。対象となる二つの活動システムとは、「教科指導」と「教育相談」である。この二つの活動システムは、独立して存在しているように見えるが、学校という大きなシステムの中で相互に作用し合っている。

第3図は、エンゲストロームが示した「第三世代活動理論のための最小限二つの相互作用する活動システムのモデル」に、従来の典型的な教科指導と教育相談にかかわる活動システムをあてはめたものである。各成分に該当するものを具体的に書き加えるなど一部改変した。

図中の左側にある三角形は、従来の典型的な教科指導にかかわる活動システムである。「教科書の内容理解」が対象1である。これは、「主題に関する事実や手続きである内容レベルの知識」(パーキンス 2004 p. 134)と言えよう。対象2は、これに「高次の知識(higher-order-level-knowledge)」を加えて拡張したものである。この高次の知識は、「問題解決の方略、正



第3図 相互作用する二つの活動システムのモデル (Engeström 2001 p. 136 改)

当化のスタイル、説明、さらにその領域の研究方法の特徴についての知識」(パーキンス 2004 p. 123)を指し、創造力、推論力、企画力などを発揮するために欠かせない知識であると言える。

図中の右側にある三角形は、従来の典型的な教育相談にかかわる活動システムである。対象1には、生徒が相談し、教員が支援するという垂直的な関係を背景とする「学校生活への適応」が相当する。これに生徒同士(仲間)という水平的な関係を加え、さらに適応の場を学校から社会へと拡張させた「社会的な解決能力」と言うべきものが対象2である。

### (2) 変革の種子「対象3」を求めて

二つの活動システムにおいて、対象1から対象2へと拡張すると、「双方の対象は近づき部分的に重なり合うことになる。この越境的な対象の『交換』において、新しい対象3が立ち現れてくる。そして、そうした『第三の対象』は『変革の種子(seed of transformation)』を生み出していく」(山住 2008 p. 20)とされる。

教科指導の対象2にかかわる高次の知識は、「他の人を巻き込んだり、シンボリックな媒体に頼ったり、環境や人工物を利用する」(パーキンス 2004 pp. 120-121)とことから得られるという。一方、教育相談の対象2にかかわる社会的な解決能力とは、他者との対等な関係性の中で、自身の困難さを軽減したり、乗り越えたりすることを意味している。

この二つの対象2に共通する特徴は、①人の能動的な介入、②人との対等な関係性にあると言える。よって、対象3は、この①と②を特徴とする課題解決の力を示している。このような課題解決には「対話」と「協働」が重要になるであろう。対象3は、従来の典型的な教科指導にかかわる活動システムを変革していくときの指針になる。

### (3) 「ピア・サポート」をツールとして取り入れる

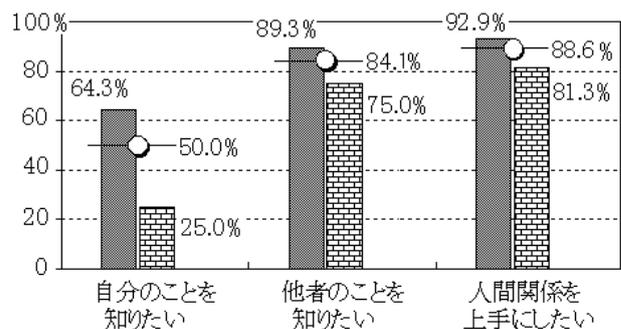
#### ア なぜ「ピア・サポート」なのか

生徒同士が聞き役になり、助言者役になるなど、同じ立場にある人による支え合いの仕組みを「ピア・サポート(peer support)」という。ピア・サポートでは、サポートする側とサポートされる側は固定されず、状況によって役割が入れ替わるところに特徴がある。これは、生徒同士で支え合う関係づくりを促すにふさわしい方法である。

ピア・サポートには、①自己理解・自己受容、②他者理解・他者受容、③グループ・コンセンサスという三つの課題がある。そして、この課題を達成するために、具体的なエクササイズや技法が用意されている(松井・稲垣 2009)。これは、新しい授業モデルに適したツールであると言えよう。

#### イ 生徒のニーズに応えるピア・サポートの課題

第4図は、ピア・サポートにおける三つの課題に関して、生徒のニーズについて尋ねたアンケート調査



○「とてもそう思う」「まあまあそう思う」と回答した全体の割合  
■ 友だちか先生に相談する ■ 友だちにも先生にも相談しない

第4図 生徒のニーズ

の結果である。

図中の○—○—を見ると、「他者のことを知りたい」、「人間関係を上手にしたい」と答えている人がとても多く、好ましい人間関係をつくりたいという生徒のニーズはかなり高い。検証授業の話を伝え聞いて、「倫理」を選択していない生徒が、特別に授業を受けたいと申し出てくることもあった。

図中の棒グラフを見ると、友だちにも教員にも相談しない人は、友だちか教員に相談する人(両方に相談する人も含む)に比べて、生徒のニーズが低いことが分かる。特に「自分のことを知りたい」という項目での低さは顕著である。そこで、第1表のクロス表に従って、独立性の検定を行ってみた。すると、表中①のパターンでは、有意水準5%で、対応関係が認められた。しかし、②と③のパターンでは、対応関係は認められなかった。すなわち、友だちに相談しない人は、他者のことを知りたい、人間関係を上手にしたいと思うことはあっても、自分のことを知りたいとは思っていない。また、友だちに相談する人は、自分のことを

第1表 2×2クロス表

①	自分のことを知りたいと思う			②	他者のことを知りたいと思う				
	Yes	No	計		Yes	No	計		
友だちに相談する	Yes	17	10	27	友だちに相談しない	Yes	24	3	27
	No	5	12	17		No	13	4	17
	計	22	22	44		計	37	7	44

③	人間関係を上手にしたいと思う			
	Yes	No	計	
友だちに相談する	Yes	25	2	27
	No	14	3	17
	計	39	5	44

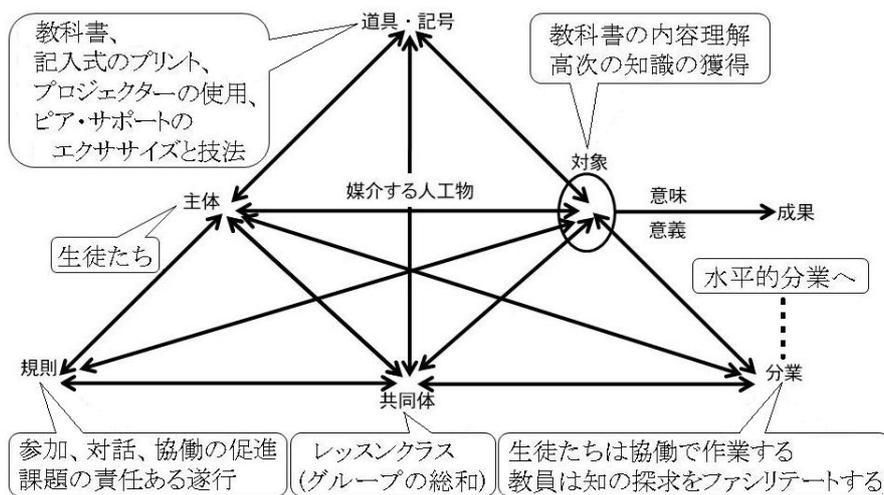
☆カイ二乗統計量は

①：約 4.70

②：約 1.20

③：約 1.09

☆有意水準5%のときの臨界値は約 3.84



第5図 検証授業における活動システムのモデル (Engeström 2001 p. 135 改)

知りたいと思うということである。このことは、特に、自己理解・自己受容の課題に力を入れることで、友だちに相談しなかった人が、相談するようになる可能性があることを示唆している。

#### (4) 検証授業における授業の活動システム

第5図は、第2図を下地にして、検証授業における活動システムを表したものである。各成分に該当するものを書き加えるなど一部改変した。この授業モデルは、人の能動的な介在、人との対等な関係性による課題解決という対象3の視点と越境の文脈を織り込んでデザインした。

「主体」は、対象3の内容を踏まえ、個人を単位とするのではなく、生徒たちというように集合体としてとらえることとした。

「道具・記号」には、授業テーマに関連したピア・サポートのエクササイズと技法を取り入れた。黒板の代わりにプロジェクターを用い、エクササイズの流れを視覚化してわかりやすいものにした。ノートの代わりに記入式のプリントを使用することで、生徒が書き写す量を最小限に絞り、自発的なメモを取れるよう工夫した。

「対象」には、従来の教科書の内容理解に、高次の知識の獲得を加えた。

「共同体」は、学習者の「個の総和」ではなく、「グループの総和」としてのレッスンクラスと位置付けた。エクササイズの内容に合わせてグループの大きさを変えることとした。

「分業」では、垂直的な役割分担ではなく、「水平的分業」を目指した。すなわち、教員の役割は、知の体現者、伝達者ではなく、自らも知の探求者として、生徒たちと一緒に課題解決のプロセスをたどることに重点を置いた。生徒は、互いに聞き合い、話し合い、協働する関係において学習活動を進めるものとした。

「規則」には、集団活動にかかわるものを定めた。今回は、検証授業向けのモデルであるため、評価に関

係する制限を設けなかった。今後は、対話、協働の成果を問う評価法、評価基準が必要になると考えられる。

## 4 検証授業による実践

### (1) 検証授業のプログラム

検証授業は、10月上旬から中旬にかけて、公民科「倫理」の科目で実施した。1回目の授業は、2年生29名、3年生8名を対象に「青年期の課題と自己形成」、2回目の授業は、2年生28名、3年生12名を対象に「男女相互の理解・尊重・協力」という内容を扱った。検証

授業のプログラムは、次に示す表の通りである。

	1回目の授業	2回目の授業
(A) 小講義 I 教科書の内容	a. エリクソンの生涯 b. アイデンティティの概念	a. ミードの研究調査 b. ボーヴォワールの思想
(B) エクササイズ の準備	二人組づくり	グループづくり (4～5名)
	プロジェクターを使用してエクササイズの段取りを説明	
(C) エクササイズ の実施 ①ピア・サポートが目指す課題 ②エクササイズの内容	①自己理解・自己受容、他者理解・他者受容 ②インタビュー形式の心理テスト ※校内聞き取り調査の説明を(F)の後に行う。	①他者理解・他者受容、グループ・コンセンサス ②a. プロジェクターを使用した心理テスト b. 付箋を使ったグループワーク
(D) 小講義 II ①エクササイズの解説 ②教科書の内容	①クレッチマーの類型と特徴 ②アイデンティティの確立	①性差心理 ②社会的・歴史的に形成された性差
(E) シェアリング		
(F) 振り返り		

### (2) 検証授業におけるエクササイズ

#### ア インタビュー形式の心理テスト

エクササイズで用いた心理テストには、クレッチマーの類型に従って、パーソナリティを分類するものを選んだ。まず、インタビューをする側は、相手に心理テストの質問をし、その答えを聞いてチェックシートの該当箇所に○をつける。次に、その質問内容について、相手の普段の様子やインタビュー時の印象などから予想して、該当箇所に○をつける。この二つの回答

を比較すると、自分から見た「私」と他者から見た「私」の違いが分かる。このインタビューを12問行ったところで役割を交代する。各自で得点を集計して、パーソナリティのタイプ（Z型、S型、E型）を判定する。なお、ソーシャルスキルの基本として、インタビュー時の「スマイル」、「うなずき・あいづち」を奨励し、答えたくない質問を受けたときの対応例もいくつか紹介した。

心理テストを用いた既成のエクササイズでは、心理テストを自己実施・自己判定で行うようであるが、対象3の内容を生かすために、対話、協働を促すインタビュー形式で実施することとした。

### イ 校内聞き取り調査

「異性の様子で不思議に思うこと、わからないと感じること」について、校内で、身近な人への聞き取り調査を生徒に指示し、調査用のシートを配付した。このシートには、調査結果を書き込むスペースとは別に、具体的な調査の段取りも書かれている。

このエクササイズは、生徒の活動がレッスンクラス内の人間関係を越え、授業時間（50分）の枠を越えて行われることから、「共同体」と時間の越境を企図している。また、教員と生徒、生徒同士の協働を演出し、聞き取り調査のデータを使って授業が行われることを強調するため、「次回の授業が面白くなるか、つまらなくなるかは君たちにかかっている」とアピールした。

### ウ プロジェクターを使用した心理テスト

エクササイズに用いた心理テストには、心理的な性差の程度を測るものを選んだ。15の質問をスクリーンに投影し、生徒は、それを見ながら回答する。各自で得点を集計して、自分のタイプ（男性型、女性型、男性と女性の間型）を判定する。

心理テストにプロジェクターを使用した理由は、教室内での対話がオープンになり、他者の声を聴きながら考えるという機会が増えると考えたからである。

### エ 付せんを使用したグループワーク

生徒は、校内聞き取り調査で集めたデータを一枚一枚付せんに書き込む。グループシートは、2×2に分割された表で、男性か女性かの区別を縦軸に、性差の

特徴か個人的な特徴かの区別を横軸に区分されている。付せんに書かれた内容が性差によるものか、個人的なものかを話し合いながら、グループシートにはっていく。話し合いの過程で出てきたものも付せんに書き、グループシートにはる。なお、話し合いのとき、心理テストの判定結果を話題にしても良いとした。グループシートが完成した後、各グループの代表者が「みんなが思わず納得するユニークな意見」についての発表をし、シェアリングを行った。

## 5 授業モデルの検証と考察

### (1) 有効なツールとして働くピア・サポート

第2表の①と②からは、ピア・サポートの課題に対する生徒の達成感の高さがうかがえる。振り返りに見られる生徒の気づきを整理すると、次のようになる。

- ◇自己理解・自己受容での気づき
  - ・自分のことが好き、このままの自分で良い、自分に自信が持てたなどの自己肯定感
  - ・気付かなかった自分を知ったときの驚き
  - ・自分に対する興味・関心
- ◇他者理解・他者受容での気づき
  - ・他者の優しさ、気遣い
  - ・他者に対する意識の変化、他者理解への意欲
- ◇グループ・コンセンサスでの気づき
  - ・案外上手にできたなど対人緊張感の軽減
  - ・多様な意見がある、同じような考え方をする人が多い、自分と同じ考え方の人がいる
  - ・人間関係を円滑にするスキル等の発見

このように、ピア・サポートのエクササイズを取り入れた授業モデルは、心理教育的援助サービスとして有効であったと言える。こうした授業は、生徒によるピア・サポート活動の基盤形成に寄与するものであると考えられる。

### (2) 教育相談活動への波及

第2表の③は、学校での学習が、生徒の生活世界へとつながっていくという「越境」の可能性が示されている。振り返りの自由記述には、自己の特性に対する深い理解、自己変革への意欲などが書かれている。また、「今まで悩んできたことがバカバカしく思えてきた」「大人になった」「抜け殻に魂が入りそうだ」などのコメントが寄せられている。そこには、生徒が人としての成長を実感している様子が見えうかがえる。

検証授業を通じて顔見知りになると、生徒からは、日頃の人間関係をめぐる具体的な問題でアドバイスを求められるようになった。検証授業でのことが周囲に伝わり始めると、顔見知りでない生徒も相談に訪れるようになった。

こうした状況であれば、教員は生徒のニーズに気付

第2表 振り返りアンケートの結果

①	この授業を受けて、自己理解が進んだ 他者理解が進んだ	96.3% 77.4%
②	グループワークをしたとき、 自分の言いたいことを伝えられた 友だちの話をよく聴くよう頑張った	79.2% 92.9%
③	この授業は今後の生活に生かせる	86.7%
④	この授業の雰囲気に溶け込めた	88.0%
⑤	校内聞き取り調査は面白かった	90.0%
備考：各項目の割合は、各質問に対する四つの選択肢のうち「とてもそう思う」「まあまあそう思う」と答えた人を示している。		

きやすくなり、適切な対応が可能になるであろう。今後は、授業を契機に、生徒から寄せられた相談をどのような形で校内の支援システムにつなげていくかが、課題になると考えられる。

### (3) 生徒の意欲的な授業への取組み

第2表の④からは、生徒が意欲的に授業に参加している様子がうかがえる。検証授業を終えた直後、ある担任は、日頃気にかけている生徒が、いつもとは違う生き生きとした表情で授業を受けていたと知らせてくれた。振り返りの自由記述には、多くの生徒が授業の楽しさ、面白さ、学習への意欲などについて書いている。「ふだん、あまり考えないことが学習できてよかった」「知識が増えたとし、視野が広がった」というコメントも寄せられている。

生徒の負担になってはいないかと危惧した校内聞き取り調査も、第2表の⑤を見ると、それが杞憂であったことが分かる。また、付せんを使ったグループワークでは、付せんの何枚かを区画された境界線の上にはっているグループが出てきた。理由を尋ねると、他者との対話、協働を手掛かりにした学習を通じて、枠内には収まらない事象があることに気付いたのだという。この生徒たちの発見は、物事を深めていくプロセスの端緒であると言えよう。

### (4) 新しい授業モデルの協働開発に向けて

検証授業における授業モデルについて、次のような意見が教員から寄せられている。

- ・「保健体育」の授業でも、同じような活動をしたことがある。
- ・「理科」の実験において有効な活動である。
- ・生徒の現状に合った学習スタイルである。
- ・「現代社会」では、青年期を扱う単元をどう進めていけば良いか迷うことが多いが、この方法がモデルになる。
- ・総合学科の必修科目「産業社会と人間」の内容として適している。

この授業モデルは、幅広い教科・科目で実践可能であるという認識を共有することができたと考えている。教科・科目を越えた多くの教員が、この授業モデルをたたき台にして、協働で新しい授業モデルを開発することも可能であろう。また、授業におけるスクールカウンセラーとの連携についても検討する価値はある。この授業モデルは、心理教育的援助サービスを提供するスタッフの側にも「越境」を起こす可能性があると言えよう。

### おわりに

興味深いことに、身近なところで「越境」の文脈を

見出すことができる。例えば、学校という制度的な境界を越え出る高大連携の取組み、中高一貫校の設置、職制という壁を越えて学校に配置されたスクールカウンセラー、校内ではクラス、教科、学校運営グループを横断し、校外の機関とも連携する教育相談コーディネーターなどである。

エンゲストロームの活動理論は、大きな組織的転換をもたらすパラダイムであるとされる。こうした身近な「越境」は、新しいパラダイムの到来を予感させるものとも言えるかもしれない。

本研究は、従来の典型的な教科指導と教育相談という二つの活動システムにおける「越境」の試みから始めた。この変革の運動は、更に進めていくと、心理教育的援助サービスの枠組みさえも越えていく可能性がある。その意味で、新しい授業モデルは、拡張的な潜在力を持つという点で評価できると考えている。

本研究に協力してくださった教職員の皆様に感謝を申し上げ、研究の結びとしたい。

### 引用文献

- 神奈川県教育委員会 2007 「かながわ教育ビジョン」
- コミュニケーション学習研究会 2001 <文部省「教育方法の改善に関する調査研究委嘱」>『「生きる力」の育成をめざした「コミュニケーション学習プログラム」の開発研究』（<http://www.nier.go.jp/arimoto/Recent/Comcom/pdfs/Cover-Summary.pdf> (2009. 5. 8 取得)) p. 13
- 文部科学省 2009 「高等学校学習指導要領」 p. 1
- 石隈利紀 1999 『学校心理学』 誠信書房 p. 15
- パーキンス 2004 「パーソン・プラス：思考と学習における分散的見解」(Gavriel Salomon 編、松田文子監訳『分散認知』 協同出版)
- 山住勝広 2004 『活動理論と教育実践の創造』 関西大学出版局 p. 69
- 山住勝広 2008 「ネットワークからネットワークへ」(山住勝広・ユーリア・エンゲストローム編『ネットワーク』 新曜社)
- Engeström, Y. 2001 Expansive Learning at Work: toward an activity theoretical reconceptualization. *Journal of Education and Work, Vol. 14, No. 1, 2001* ([http://language.la.psu.edu/~thorne/aplng584\\_2007/Engestrom\\_2001\\_ExpansiveLearning.pdf](http://language.la.psu.edu/~thorne/aplng584_2007/Engestrom_2001_ExpansiveLearning.pdf) (2009. 12. 8 取得))

### 参考文献

- 松井理納・稲垣応頭 2009 『集団を育むピア・サポート』 文化書房博文社
- ユーリア・エンゲストローム、山住勝広・松下佳代・百合草禎二・保坂裕子・庄井良信・手取義宏・高橋登訳 1999 『拡張による学習』 新曜社